



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）
「郷土とことわざ」（人間の科学新社・共著）等

「回文 たがいに・にいがた その2」

「たがいに新潟」「亀田新津新潟たがいに ついにダメか」等先回お届けした新潟の回文ですが、なにかと反響がありました。ある人は「“過疎化”の回文を入れるだけでもっと長文になります」と教えて下さいました。「亀田新津新潟過疎化たがいに ついにダメか」、ホントになったらオオゴトですので解説はいたしません。またある人は「カツラ落下」は、「カツラ特ダネ 抱くと落下」「カツラ灯籠売ろうと落下」とちょっと追加するだけこれまた大変な状況になることを報告してきました。

それにしても情報時代の昨今です。もう某コーナーには、先回の「柏崎の木澤歯科」だの、「小須戸」の回文が出ており、「わたし 負けましたわ」ですが、実はその昔まだネットが普及していなかった時代、筆者渾身の作新潟弁辞典に載せた回文でありました。それだけ気に入って下さったしょ（人）がいるということで、どうぞみなさま、遠慮しがちに出典をできれば入れてお使い下さいませ。ということで第二弾、御当地ガイドと共にお届けいたします。

まずは、北から「胎内泣いた」。旧中条町の城の山の地に伝わる「ひと籠山伝説」、その高まりを掘ってみたら、おここ、ほんとに古墳だったてば、おまけに前期古墳時代のものとしては日本海側最北端！これまた古代史上の大発見！地元や考古学者を狂喜感涙させました。

お次は津川で「津川わが津」。阿賀野川沿いの旧津川町は江戸時代阿賀野川の水運で栄えた町でもありました。平成17年、津川町、鹿瀬町、上川村、三川村と合併し

て阿賀町となりました。津川の津は、舟運の港を表す地名です。

阿賀町と混同しやすいのが阿賀野市ですが、この阿賀野市の地名回文は「安田おろしで城を出す（せ）や」。安田おろしとはこの地に吹く強風のこと、局地風ともいわれています。鎌倉時代初期に築城されたという安田城。城内の不審者は強風と共に下がりおろろ〜！の気迫が感じられます。なお、この地方の特色で『ス』と『セ』の発音があいまいになっております。

今度は中越、三条市、旧下田村にちなんで「下田らは腹立たし」。下田といえば越後と会津の県境八十里、長岡藩の河井継之助、終焉の地です。北越戦争で負傷して戸板で運ばれる河井が詠んだ辞世の句「八十里腰抜け武士の越す峠」はあまりにも有名ですが、越後を攻防できなかった氏の無念もさることながら、この地の下田（の衆）らもさぞや腹立たしく口惜しかったことでしょう。

上越市、旧高田市は雁木のまち、雪国ならではの現代版アーケード、雁木は雨雪除けと人々の社交場です。そこで「高田の雁木 銀河の高田」。雪晴れに、雁木越しに夜空を見上げれば、冴え冴えとした銀河またたく情景が浮かんでくる美しい回文で「わたし や（止）めやしたわ」と少しなまって締めますね。

新潟広し回文めぐり、みなさまも作ってみませんか？

